
SAME SOUNDS

沙綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A M E S O U N D S

【Nコード】

N 2 2 4 5 G

【作者名】

沙綾

【あらすじ】

ある日突然訪れる奇跡。その奇跡は彼女らの人生を狂わせていく…。最後は不思議な気持ちになると思います。

花と君と…（前書き）

大学も卒業し、立派な大人へ歩むはずの紗莉。だが彼女は全くやる気もない。だが人々との出会いにより変わっていく…。

花と君と…

第1話 はじまり。

「ねみい〜」

頭はボサボサ。洋服のセンスはなし。おまけにダメ女。

せつかくの、ミディアムレイヤーとやらは崩れている。多分、くしで直せば平気だろうが。

このままでいいのか！？　なんて、前は思っていたけど、今はもうどうでもいい感じ。

でも、アパートの家賃を滞納したことがないのが唯一の自慢。

紗莉は今日も、バイト探しの旅へ出かけた。

と、いつてもただの散歩。暇つぶしともいえる。

「とりあえず走ってみつか」

あてもなく走り出すのがクセ。

今日はまだ、春になったばかりで、ぬるい春風と暖かい太陽の光はとっても気持ちのいいものだった。

そんなとき、歩道橋の上を走っていると、誰かにぶつかった。

「すみません！ 大丈夫ですか？」

ぶつかった相手は女性だった。

レディースのスーツを着ていて、綺麗でつやのある豊かな長い黒髪をもつ女性だった。

まだ20歳ぐらいで、紗莉と同じぐらいに見える。

カバンの中から物が散乱し、慌てて女性はかき集めた。

紗莉も一緒になって集めた。

「ホントごめんなさい……」

「いいんですよ。よくあることじゃないですか！ ……ん？ 電話だ。ちょっとすみません」

着信音がきこえ、女性は電話にでた。

「え？ あ、はい。は？ そうですか」

女性は電話を切った。

「遅刻で怒られましたか？」

紗莉は不安気にきいた。

だが、相手の女性は首を振り、

「急に休みになったの。なんか知らないけど、私のかわりに誰かがやるそうよ」

「よかった」

2人は笑っているうちに、流れでいつの間にかオープンカフェの端に座り、モーニングセットなんてのを頼んでしまっていた。

「朝ごはん、食べた？ 私たべてないの」

「私もよ」

なにがなんだかわからないが、とりあえず、モーニングセットのトーストに真っ赤な苺ジャムをぬり、がぶりと一口かぶりついた。

「おいしいー！」

紗莉は目を丸くした。

相手の女性はニコリと笑った。

「そっいえばさ、あなた名前なんていうの？」

紗莉がきく。

「私は真由美。あなたは？」

「紗莉っていうの。」

「わかった。サリーって呼ぶね」

2人はコーヒーなんか飲みながら、お互いのことを話し始めた。

私の両親はいつの間にか離婚している話に共感していたり…。

実は2人も、とっくに親は離婚していた。

紗莉のほうは再婚して新しいお母さんもいる。

再婚してきたほうのお母さんから生まれたのが紗莉だった。

ちなみに、年齢は紗莉が19歳、真由美は22歳だった。

ふと気づけば、もうお昼近くなっていた。

思えば、なぜ見知らぬ女性と話をしていたのだろうか。

紗莉は考えてみた。

だけど、わからない。

だんだん、お互いに惹かれあっていた。

紗莉はこたえもわからぬまま、お昼をたべ、アドレスを交換し、真由美と別れた。

紗莉とわかれたあと、真由美も紗莉と同じことを考えていた。

しかし、この出会いの裏には、切っても切れない縁で結ばれていた。
この後、紗莉と真由美は、もう1人の女性と出会うことになる。

第2話

「いいバイト見つかった？」

日曜日の午前、晴天の下で、またオープンカフェの隅に座って、話を始めた。

「それが見つからないんだー」

紗莉は残念そうに肩をおとした。

「じゃあ、一緒に働かない？ 人数が足りなくて困ってるの」

「あ、そうなの？ じゃあ、そこで働いてみようかな？」

そして、真由美と紗莉はそのまま真由美の働く会社へと足を運んだ。

「ここだよ」

着いた場所は『ビアンカ書店』。駅の近く。

小さい本屋さんで、外見は白い壁で覆われていて清楚な雰囲気。店内には誰もいなかった。

不思議に思った紗莉は

「店長さんとかは？ 誰もいないみたいだけど」

真由美は、クスツと笑って

「店長は私で、店員さんは1人もいないんだよ」

「え、じゃあ…経営してるの？」

「そつだよ」

紗莉は圧倒された。

同じくらいの歳の女性が、店を経営しているだなんて…。

紗莉にとって信じられない事柄だった。

「ねえ、一緒に働かない？ もちろん、給料もあるから」

「働く！ 今からよろしくお願いします！」

紗莉は真由美の手を握り、輝く瞳で真由美の瞳をみつめた。

真由美はニコリと笑い、早速仕事を与えてた。

紗莉は一生懸命、まじめに働いた。

ちなみに、この間まで真由美は しだったそうで、この店は知人から譲り受けたものだそうです。

それから1週間たったある日のことだった。

黒いターバンの帽子をかぶった、ボーイッシュな雰囲気な女性が来店した。

見た目もカッコ良かった。

その人は何かの本を探しているようだったので、話しかけてみた。

「何かお探ですか？」

「ああ、まあ。えつと…」

その人は紗莉の顔を見て、

「この間、あの店員さんとぶつかってたでしょ？」

「見てましたか…」

「みんな見てたよ」

2人は笑った。だけど、紗莉はハツとして、探している本を訊こうとしたら

「ねえ、この店2人でやっているの？」

「はい。そうなんです」

「いいなー。あたし無職なの」

相手の女性は視線を下げた。

「大歓迎ですよ。ここで働きませんか？」

真由美が10冊ぐらいの本を抱えてこたえた。

相手の女性は目を丸くして、嬉しそうに帽子をとり、

「それじゃ、ここで働かせていただきます。ワタクシ、留依と申します」

留依は冗談のようにいって、頭をさげた。

その姿をみて、紗莉と真由美は微笑んだ。

こうして、留依もまた、紗莉と真由美の何かに惹かれていったのだった。

まだ開店していないが、準備もおわって、レジの周囲にイスをあつめ、お茶会をひらいていた。

「へえー。21歳なんだ！ あたしが一番年上か！」

真由美は頭の後ろを照れくさそうにかいた。

一番若いのが紗莉で、18歳だった。真由美が25歳。

次々に話題がでていって、とまらない。

「そういえば、名字なんていうの？ ちなみに、あたしは嘉川真由美。四国で生まれてないんだけどね。」

「うちは、狭山っていうの！ 珍しいだろ。」

留依は麦茶を全部飲んだ。

「はいはい！ 朝井紗莉です。」

この後も、開店時間を1時間もオーバーしているのに気がつかず、ずっと話をしていた。

時間に焦りを感じ、真由美は店を開けた。

「ありやま。今日は雨だわ。」

大粒の雨が空から降り注がれていた。

今日の客足は途絶えるだろう。…そう3人は感じていた。

だが、今日は3人の人生を180度回転してしまうのであった。

正午過ぎ、5人組の男女が来店した。

男が3人、女が2人。

「いらっしやいませ」

紗莉は奥で本を整理しながら、声を張り上げた。

真由美と留依はレジから挨拶をした。

やっとお客さんがきた…という気分。

5人は雑誌のコーナーをうろつき、適当に取り上げた雑誌をレジにもってきた。

1人の男性がレジの前に立つと、他の4人もレジの周りに集まった。

真由美は少し怖くなったが、商売なので笑顔で、

「520円になります」

と、ちょっとしたぎこちないスマイルを見せつけた。

紗莉もレジへ戻ってきた。

「あんたら、こんなところで書店なんか開いてて…もったいねえよ

な

口が悪いイメージとは程遠い、さわやかな顔立ちの男性が言った。

「どついつの意味でしょうか？」

真由美は聞き返した。

紗莉は近くにあるイスにすわり、留依と顔を見合わせた。

「あなた達は気づいてないと思うけど、すごいんだよ、あんたら

おくから女性が煙草を吸いながら問いかけてくる。

「言っている意味が…わからないんですが」

留依が口をあけた。

「まあ、とにかく、店を閉めな。それで、俺たちについてこい」

「でも…」

「言うことがきけねえのかい？」

赤い髪の女性が睨んできた。

ヤバイ…

3人は本気で思った。

「わかった。店を閉めましょう」

「じゃあ、1週間分の荷物をまとめな」

何もいえなかった。

真由美は急いで店を閉め、出かける支度をはじめた。

「お待たせしました」

20分ほどで支度をし、大きめのワゴン車に乗り込んだ。

そして、1時間ほど車の中から外を眺めていた。

だが、だめだ、と思いながらもいつの間にか深い眠りについていた。

「着いたよ」

どれくらいの間、寝ていたのか分からないが、黒髪の女性におこされて車をおりた。

着いたところはガイドブックにも載っていないなさそうくらい、深い森の中だった。

目の前には大きなお城が建っていた。

古びた外壁に、寂しげな雰囲気、廃墟といってもいいくらいだ。

耳を澄ますと、川の流れる音が聞こえて、自然と一体化している場所だった。

空はとても高かった。

「こっちにおいで」

よくみると、さっきの5人は雰囲気がよくさそうだった。

口が悪いだけで、優しそうだ。

だが、不安はまだ残っている。

これからどうなるのか、誰にも予想はつかなかった。

第4話 記憶

「長旅、ご苦労であった」

城の中へ入り、5人に紹介され、城の主人を紹介してくれた。

飯島京という60歳は越していそうな男性だった。

敵しそうな感じ。3人は恐怖も感じた。

「ほれ、挨拶をしなされ。失礼にもほどがある」

と、京は5人に自己紹介をしると命じた。

そして、あの爽やかな顔をした男性が頭を下げた。

「先ほどは失礼いたしました。お許しを」

頭をあげ、

「僕の名前は真人。名字を使うことはここでは禁止。だから真人と呼んでくれ」

次に、こげ茶色に髪を染めた男性で、

「湊といいます。で、こちらの怖そうな男が光」

右隣の男性を指差し、その光という男は

「光です。よろしくね」

茶髪で、ゴシック系だった。

「あたしは海！ U M I ー！ で、こいつが鈴！ まじヨロピロー！」

「あはは〜！ 鈴だよ〜ん。よろぴー」

海は赤い髪をしていて、鈴は黒髪で、2人とも綺麗な肌をしていた。

「わたし、紗莉です。よくわかりませんが、よろしくお願ひします」

紗莉は真由美のほうをみて、

「私は真由美です。どうぞよろしく」

「うち、留依っていいいます。よろしくです」

少し不安がほぐれてきた。

ちよつとほつとしている。

「さて、本題に移ろうかの。さ、何か食しながらお話いたそう」

そして、大きなテーブルがあるダイニングへ。

20人は座れるだろうという、くらいの長方形のテーブル。

その上には果物やジュース、お茶、シャンパンがおいてあった。

適当に3人はすわり、京たちも座った。

「君達、このネックレスを憶えているかな？」

京から3つのネックレスを見せられた。

ピンク・青・黄色の小さな丸い水晶がついていた。

まったくみおぼえがないので、分からないと答えた。

「知らないのかね？ まあ、憶えていないのもあたりまえだな。記憶を消したのだから」

「記憶を消した？」

留依は眉間にしわをよせた。

「信じてもらえるかな？ これから話すことを」

京は3人にきいた。

もちろん、「はい」と答えた。

なぜかとっても興味があつた。

そして、京、真人や光、湊、海、鈴はすべてを話し始めた。

第5話

「君らは能力をもっているんだ」

真人にいわれたとき、3人は耳を疑った。

「いや、そりゃないだろ」

留依が冗談だと、笑い飛ばした。

だが、京や真人、湊たちは笑いもしない。

「まじでかよ」

留依は脱力した。

というよりも、突然すぎて、何がなんだかわからなくなっていた。

真由美は硬直している。

紗莉はキョトンとして、平然としている。まだ、状況が飲み込めていない。

そこに、鈴が話しはじめた。

「このネックレスには、一部切り取られた記憶が入っている。なぜ記憶が消しとられたのかは、未だに分からないが…きっとバレかけたのだと思うよ」

と、話を続けている。

「バレるのは、よくないの？」

紗莉が、久しぶりに口を開いた。

「うん。特に人間には。やむを得ない場合は仕方ないけど」

海が点けたしのように言った。

まあ、なんだかわからないが、とにかく能力を秘めていることは確かのようなだった。

「で、どんな能力なの？？」

留依が肘をついて、態度がだんだん悪化していく。

真由美は「ホレ」と、促し、態度を元にもどさせた。

「まあ、このネックレスの水晶をおでこにあててみれば分かると思

「よ」

湊が水晶をあてるフリを試みせた。

「湊さん達は、何の能力だか知ってるんですか？」

紗莉が不安そうにきいている。

「いや、わからない。まあ、あててみてー！」

そう、湊や光に言われて、不安でいっぱいながらも、額に水晶を押しあてた。

なんだか、体中が温かくなってきた気分になった。

空に浮かんでいるような、生温かい水の中にいるような……。

何かに包まれている気分になっていた。

フツと目をあけてみた。

目の前には、京や真人たちが不思議そうに見ている。

少し笑っている人もいる。

頭がぼわわしていたが、何か違和感を感じた。

今なら、あの家具を移動させることができる気がする……

紗莉は突然、そう感じた。

そして、家具がドアの前に動かしてみるか。

なんて思っていたら、突然家具が動き出し、あっという間にドアの前に移動させていた。

「君は…念力だね？」

京がおどろいたように、紗莉をみつめた。

そして留依も、眠っていた能力が発揮し始めた。

一瞬にして、素手では砕くことの出来ない、ブロードの像を一瞬にして粉々にしてみせた。

真由美は、人の傷をすぐに完治させる能力だった。

「素晴らしい…。この3人は無敵だ！ これで、深山家に勝つことなど容易い…」

京はほくそ笑んだ。

紗莉だけが、その笑みをみていた。

なんだか、京が邪悪な人間にみえた。

そんな紗莉の後ろで、留依と真由美が、

「ねえ、藤沢家って誰？」

と、訊いていた。

それを紗莉はじっときいていた。

「深山家っていうのは、俺たちの邪魔をする、悪いやつらなんだ」

「どっついうっ？」

留依が鈴にきいた。

「うーん。何をするにも邪魔をするの、ね？」

海に確認をするようにきいた。

「そうなの。ま、あんたらが来てくれたからもう安心だけど」

「そうかなあ…」

留依はほっぺを赤くして、かわいらしいところもあるんだと真由美はクスツと笑った。

「そういえば、3人は全然ジャンルが違うよね。」

海が言ったことに、みんな、うんうん。と、頷いている。

「留依はショートヘアで男っぽくて…カッコイイ？ 真由美は髪が腰ぐらいまであって、しっかり者。紗莉はセミロングで、甘めな女の子って感じ！」

鈴が3人の特徴というか、第一印象を並べてみた。

まあ、確かに…と、真由美は感じた。

気づけば、もう夜になっていた。

軽く夕食を済ませ、海と鈴に部屋へと案内され、それぞれ自分たちの部屋へ入っていった。

部屋にはもう、荷物がおかれていた。

3人はふかふかのベッドにもぐりこみ別々の部屋で一夜をすごした。

第6話 目的

「食事中、ごめんね。お話があるんだ」

大きなテーブルで朝食をとっているときだった。

光が3人に話をしてきた。

それは、ここにきてもらった理由だった。

「ここにきてもらったのは、深山家を制圧することなんだ」

「制圧？ いいのかよ、そんなことして」

オニオンスープを飲みながら、留依がつぶやいた

「いいんだ。制圧しなければいけないんだから」

「ふーん。そんなもんか？」

「そんなもんだ」

光は留依に微笑みかけた。

そして、深山家にも能力者がいることを湊から知らされた。

「君達と同じ、能力者がむこうにも3人いるんだ。男が1人、女が2人。攻撃してくるし」

「そうなの？ え、対立しているの？」

真由美は不安そうに聞き返した。

「うん。我ら藤沢家の計画を邪魔しているんだ。せつかくいいことをしようとしているのに」

「どんなこと？」

「それは企業秘密ってやつだ」

真由美は、仕方ないと思い黙ってあげた。

「でも、会ってみたいね。その人たちに」

紗莉は目を輝かせた。まるで、瞳の中にダイヤモンドが埋め込まれているのではないかとおもうほど、輝いていた。

「そのうちあえるさ」

真人はサラダをたべつつ、紗莉に返事をしていていた。

紗莉もサラダを口に運び、トマトの甘さに嬉しくなった。

この後、3人はとりあえず深山家の対策として能力になれば、さらに強化することを命令された。

鈴や海、真人、光、湊は能力がないらしい。

むこうもこちらと同じような組織らしく、5人隊という人たちがいるというのだった。

そして、紗莉たちのご対面はあとわずかに迫っていたのだった。

それを、誰も予想はできなかった。

第7話 川の向こうに

あれから、2、3週間したある日のことだった。

紗莉は城にはかりいるのは窮屈なので、勝手に散歩にでかけていた。とりあえず、留依と真由美には外にすることを告げ、大自然の中へ姿を消していったのだった。

「すごく素敵…」

紗莉は20分ぐらい歩いた。そして、ちょうど座れるくらいの岩をみつけ休憩した。

目をとじ、耳を澄ませた。

小鳥のさえずり、風で木々がゆらされる音、そして川の流れる音…。

空気はおいしかった。

ふと、深山家を思い出した。

川の流れる音がしたので、そこへいけば深山家が見えるかもしれないと思い、

川の流れる音のするほうへ、吸い込まれるように足を運んだ。

10分ぐらいあるくと、大きな川に出会った。

透明な、透き通った川で、魚が気持ちよさそうに泳いでいた。

紗莉はしゃがみ、水で手をあらってみたりしていると、誰かに話しかけられた。

「ねえ、君は藤沢家の人なの？」

ドキツとした。ゆっくり対岸をみると、1人の男の子がたっていた。

そしてその男の子は近くにあった橋を渡り、紗莉の目の前に来た。

紗莉は、能力者の一人だと感じた。

自分と同じ感じがしてたまらなかった。

根拠なんてない。

「君、能力持ってるよね」

「うん。持ってるよ」

相手の男の子から積極的に話しかけてきた。

イメージしていたものより、とても優しく、雰囲気もよかった。

「俺は隼人っていうんだ。きみは？」

「うちは紗莉っていうの」

名前をきくと、嬉しそうにして、紗莉の前にしゃがんだ。

「まさか、噂の能力者にあえるなんて。1度でいいから会いたかった」

「うちもなの！ 誰でもいいから、会ってみたいと思っていたよ」

そのまま、何時間も話をしたいところだったが、急に雨がふりだした。

大きくて、分厚い雲に空はあっという間に覆われ、大粒の雨が降り、帰らなければならなくなった。

「また会おう。んじゃ」

そして、隼人は風のように走り去っていった。

それからというもの、何度も人目を気にしながら、話をするようになっていった。

いいのだろうか、と思うこともあるが、隼人と話すことは駄目だと誰もいっていなかったので良しとしている。

そして、いつの日にか、二人の間に友情が芽生えていた。

第8話 暗雲

「おかえり。ぬれたっしょ？」

玄関に入るとすぐに、留依と真由美が心配して待っていた。

紗莉はしぶ濡れになっていた。

留依は適当にタンスの中からひっぱりだしてきた3枚のタオルの中から、1枚ずつそれぞれに配った。

紗莉はありがとう、と言い、自分の腕や頭を拭いた。

留依と真由美もばかだなあ、と言いつつ、優しく頭を撫でるように拭いた。

「ありがとう。いや、傘もって行けばよかったよ」

「今の雨はにわか雨でしょ。昨日、たまたま部屋のテレビで天気予報見たとき、晴天って書いてあったもん」

真由美は、にこにこ笑っていた。

「まあ、入ろうぜ」

留依は先に部屋の中へ入っていった。

留依に続くように真由美と紗莉も入っていった。

「京さん。紗莉は隼人という奴と会っているようです。深山家の」

「ああ。そうみたいだな……。なんとしても、会わせないようにせね

ば

京と真人達は秘かに、京の部屋で作戦を練っていた。

真人の後ろには、残りの湊、光、海、鈴が真剣な目つきでいるのであった。

今日も散歩に行くといって、また川のほうへ小走りで行ってみた。

やっぱりそこには、隼人の姿があった。

「紗莉！」

隼人は大きく手を振り、橋をわたり、こちらに走ってきた。

「隼人！！！」

紗莉と隼人は適当にしゃがみこんだ。

紗莉にはずっと訊きたいことがあった。

前に真由美と湊が話していた計画のこと。

「ねえ、あのさ、突然で悪いんだけど……」

そして、計画をきいてみようとした。

隼人は少し考え、

「なんかね、藤沢家を倒すんだって。ま、俺には関係ないけど」

「え…：そうなの？　　こちらは、深山家を倒すって…：」

隼人の顔は驚いているみたいだけど、わざと隠していた。

「へえ。でも、そうなたとしても紗莉には攻撃しないな」

「うちも！　　ってか、なんの能力？」

「俺はね、呪いなんだ」

「呪い！？」

すごい…。紗莉は目をキラキラ輝かせ、隼人に

「すごすぎ！　　うちなんか念力だよ！？　　呪いだなんて…：敵なしだね！」

そういつてくれる紗莉が、隼人にとっては嬉しかった。

「念力！？　　なんだって…：！？」

隼人はまたも驚いた。

まさか、念力の能力者がこんなにも近くにいるなんて…：。

「念力…：って本当？」

「ええ。本当。嘘なんかついてどうするの？ ってか、どうしたの？」

「いや…。実はね、俺らのリーダー…まあハルっていう女からきいたんだけど」

隼人は深呼吸し、自分自身を落ち着かせ、話をした

「光の力を持つものと、闇の力を持つものが出会った次の新月の日に、何かがおこるらしいんだ」

「それがどうかしたの？」

「そのね、力を持つものは君と俺なんだって」

「ふーん。よくわからないけど、すごいんだ」

このときはまだ、何も思わなかった。

ただの噂話としてとらえるだけである。

だけど、新月の日の直前から紗莉と隼人は苦しみを味わう。

友情を失い、すべてを失いかける時が近づいてきているのであった。

そして真由美と留依も、身も心も傷つくこととなる…。

すべては、紗莉と隼人が出会ってしまったから…。

第9話 雨。

紗莉、留依そして真由美は屋敷の中にある図書室にいた。

図書室はとても広い。天井も高く、奥行きも広々としている。

ここには5万冊もの本がずらっとならべられている。

静かで落ち着きのあるところだった。

ドアを開ければ、長い机がいくつも並べられていて、ここで読める。

「あつたー！ これ、ずっと読んでみたかったのー！」

真由美が見つけた本は、物語が描かれている小説だった。

さし絵も美しく、真由美は一度でいいから目を通して見たかったらしい。

留依もスポーツの事が書かれている本を探していた。

サッカー・野球・テニス…スポーツはとても好きだ。

とりあえず、テニスの本を読んでみることにしていた。

真由美と留依は入り口の近くに行き、本を読んでいた。

紗莉は昨日の隼人の言っていた「光の力と、闇の力のこと。新月の夜に何が起こるのか」を調べてみることにしていた。

なんでもありそうなので、なんとなく探してみた。

紗莉は吸い込まれるように奥へ奥へと足を運んでいった。

気づけば行き止まり。一番奥へ来てしまったのだった。

後ろを振り向けば電灯の明かりだけが見える。

「あちゃー。しまったなあ……」

最後に何か見ている。

紗莉はあたりを見回した。

すると1つの棚に1冊だけポツリと寂しく、誰かを待つように立て掛けられていた。

その本が気になったので、手に取り、留依と真由美の元へ戻った。

とても重く、持つだけで精一杯だった。

だけど、両手で抱え込むようにして歩きながら戻った。

「おお、なんかいい本見つけられた？」

留依がきく。

「うん、まあ……」

紗莉は苦笑いをしながら、留依の隣に座った。

前をみると、真由美が座っていた。

紗莉はよく本を見てみた。

本の題名や著者は書いていなかった。

ボロボロになっていて、茶色く変色しているところもあった。

紗莉は静かに開いた。

少し読み続けると、なんと「光の力、闇の力。新月の夜に起きる」と「が詳しく書かれていた。

紗莉は本を借りることにした。

「ごめん。先に部屋戻ります！」

紗莉はこの本は一人で読むべきだ、と読んでいて思った。

今のページに棊を挟んだ。

「うん。じゃあ、夕食で」

真由美は本を読む姿勢のまま、目線だけ紗莉のほうにむけた。

紗莉は軽く手を振り、走り去っていった。

「なんだろうー、紗莉のやつ。最近変だよなー…」

紗莉の姿が見えなくなるまで、2人は目で追いかけた。

留依は怒りながらも、紗莉を心配していた。

「ね。どうしたのかな。しかも、散歩いつもいくし。長いし」

真由美も心配しているところは同じだった。

「今度、ついていってみようよ」

留依の声が少し、図書室の中だけに響いた気がした。

「光…闇…」

紗莉は部屋にこもった。

ベッドの上に蹲るようにして、本をひらいた。

栞がさっきのページまで導いてくれた。

「あつた…」

ここにかかれていた事は、隼人と言っていた事と似ていた。

光を持つものと、闇を持つものが出会った時、世界が変貌する。

それは新月の夜に起きること。

大洪水、地震、火災…。山の神と海の神と空の神が悩み、苦しみだ

す。

最後は誰にも予想はつかない。

平和になるか、滅亡するか、何も変わらないか…。

光とは、朝のこと。闇は夜のこと。

紗莉がどちらで、隼人がどちらかはわからない。

だが、とにかく、光と闇は出会ったみたいだった。

その証拠に、次の文に、こう書いてあった。

出会えば、その人々にはもう1つの力が生まれる。

紗莉はこの頃、心が読めるようになっていた。

さっき、図書室からでようとしたとき、留依と真由美は心配している、と聞こえてきた。

紗莉は、さらに読み進めた。

が、これ以上のがかりはなさそうだった。

本を手から落とした。

重いし、ずっと持っていて疲れる。

本は床に寝ていて、紗莉はため息をつきながらその本を持ち上げた。

ヒラリ…と、一枚のメモが舞い落ちてきた。

本に挟まっていたみたいだった。

紗莉はそのメモを取り上げ、読んだ。

何かの地図のようだった。

赤いペンでバツ印が、川の上流のほうにあった。

ここにお宝であるのか、と少女のような気持ちになった。

紗莉は地図をポケットにいれ、大切にした。

このあと、絶対に役に立つと根拠なく感じた。

紗莉は時間を見た。

午後1時47分。

今日も隼人と会う約束をしている。

2時ごろ、会おうと。

紗莉は急いで屋敷を出た。逃げるように、駆け足で。

外は豪雨だった。風が木々と共に猛犬のように吠え続けていた。

紗莉は傘もささないで、突っ走った。

冷や汗がなぜか出てきた。

あまりに早く走りすぎて、3秒ぐらいで川についた気分だった。

川は増水して、水の色は茶色くなっていた。

「大変なんだよ！」

紗莉は隼人の元へよろよろしながら、走った。

「どうした!？」

「あのね、昨日隼人が言ってた…」

「光と闇のこと？」

「うん、そう！」

紗莉は隼人の目を見て、隼人が目をそらせない位強い眼力で

「ちょっと、あの木の下で話そう」

隼人は紗莉を木の下に誘導した。

「滅亡するかもしれない。本に書いてあったの」

紗莉は本に書いてあったことを話した。

隼人も、この雨が降っている原因が自分たちにあると、気づいた。

「こつちも報告があるんだ」

「何？」

隼人は深山家のあるほうをみて、

「今日、夜10時。藤沢家を攻撃しに行くことになっている」

「は!？」

紗莉は急いで戻り、このことをみんなに知らせようとした。

だが、隼人は戻ろうとする紗莉を声で引き止めた。

「もし、藤沢家の連中に攻撃の話が伝わったら、俺は抹殺される」

紗莉は足がぴたりと止まった。雨が地を叩く音だけがきこえる。

隼人の心は本気だ、紗莉は読み取り振り向いた。

「わかった。言わない。でも、敵同士になるんだね」

紗莉は寂しい眼を隼人に向けた。

隼人はどうすることもできなかった。

うん、と頷くことしかできなかった。

「隼人に負けないからね。あと、私の信じられる人には伝えるから」
冗談まじりに答えた。精一杯の答えだった。

紗莉は寂しさと不安を押さえつけ、笑顔で去っていった。

隼人は紗莉の姿が消えるまで、大粒の雨に打たれていた。

第10話 発覚

「紗莉、今までどこに行ってたの？ と、いうよりも最近どこに行ってるの？」

留依は紗莉を自分の部屋へ呼び、真由美と一緒に紗莉をみつめ続けた。

紗莉は頭を深く下げた。

「ごめん。本当にごめん。今から事情を話す」

紗莉は顔をあげて、隼人とのことを話した。

そして、今日あったことも…。

それをきいたとき、真由美と留依は声もでなかった。

「じゃあ、今日くるってこと？」

紗莉は小さく、頷いた。

留依はフツと息を吐くと

「うちな、今まで黙ってたんだけど…なんかしらねえが、能力が増えたんだよ」

「あ、あたしも！」

留依と真由美までもが、能力を増やしてしまった。

「私も、実は心が読めるようになったの」

紗莉も打ち明けた。

そして留依は予知、真由美はバリアを張れる能力が身についたという。

「ごめん…。私と隼人が出会ってしまったばかりに」

真由美と留依は何もいえなかった。

なんと言っていていいかわからなかったといったほうがいいかもしれない…。

「でもね…」

真由美が口を開いた。

「出会ったとか、そんなのは運命でしょ？ 紗莉はただ、運命に導かれるがままに進んだだけなんじゃないの？」

「そうじゃん。お前が会いたくて会ったわけではないんだから、仕方ないんじゃないか」

紗莉は嬉しかった。

留依と真由美が心から許してくれている。紗莉は、心の温かさまで伝わってきた。

3人は確信した。

もし、深山家がせめてこようが、この3人ならば勝ち抜けると。

そんなとき、部屋のドアが吹き飛ばされた。

ドアは窓に直撃し、ガラスが割れた。

「邪魔する」

京が真人、湊。光、鈴そして海の5人を連れて、部屋に入ってきた。みんな黒い服に身を包んでいた。

京は黒のタキシード。

5人はくろのズボンに白いタンクトップ。腰には剣、銃がぶらさが

っている。

女は赤くて大きな夕チアオイの花が頭に留められていた。

「どうしたの？」

紗莉たち3人は京たちを見上げた。

「今、深山家が今夜出陣するという情報がはいった」

湊が説明した。だが、雰囲気がいつもと違う。

冷たい。全体的に、みんな、冷たい。

「…で、どうすればいいの？」

真由美は眉をひそめた。

京はばかにするかのようになり、

「どうするって…、戦ってもらおうよ、君らには」

すると5人はいつせいに右手に剣、そして左手の銃を3人に向けた。

紗莉は念力で銃をとりあげ、窓の外へ投げ飛ばしてみせた。

「ほほお…、紗莉やるなあ。ま、せいぜい頑張ってくれ」

京はまた笑い、3人を不快な想いにして、部屋を出て行った。

「紗莉、やるじゃない」

真由美が笑った。留依も爆笑し、手を叩いた。

紗莉は照れながら笑った。

「今夜はとりあえず、様子をみながら頑張ろうぜ」

留依は手を大きく開き、2人の前に突き出した。

真由美と紗莉も微笑み、留依の手の上に更に手をのせた。

そして、留依の合図で

「いくぜー!!」

「オ！」

3人は天井にむかって、いや、天井の上の空にむかって、コブシを振り上げた。

京が何を考えているのか…。

紗莉たちはもう、そんなことを気にする暇はない。

今はもう、戦いにそなえるだけ。

もう、選択肢もないし、逃げ場もない。

立ち上がらないと、だめなんだ…。

第11話 p m , 1 0 : 0 0 …

いつも、紗莉と隼人が会う川で、対岸から深山家を睨みつけている藤沢家の人々がいた。

川をはさみ、ちょっと遅れて来た深山家の人々も藤沢家を睨んでいる。

深山家も、藤沢家と同じ人数を連れていた。

前に3人、隼人その他の男の子が2人いた。

その後ろには、5人隊がいた。男3人、女2人だった。

少しの間、沈黙がながれた。

京は、沈黙を破り、

「ハル。遂にこのときが来た。さあ、始めようじゃないか…」

「望むところだよ」

ハルは答えた。

ハル…。紗莉たちは初めてみた。

鼻の高い、40歳ぐらいの女性だった。

見た目は若いが、眼を凝らしてみると、頬や目元が年齢を教えるようだった。

「さ、お前達。出番だよ」

ハルは隼人たちに言った。

隼人たちは、頷き、紗莉たちのほうに目をむけた。

紗莉はそのとき、心の声が聞こえた。

（紗莉、京とハルの心を読むんだ）

紗莉はすぐに、隼人からだとわかった。

すぐに紗莉は京に意識を集中させ、心の声をきいた。

(さあ、もうすぐで世界が俺とハルのものになる…)

紗莉は眼を丸くし、隼人のほうを見た。

「 どうかしたの、紗莉？ 」

真由美が心配そうにきく。

「 大変… なの。 ちょっと待って、話かけないで。 ごめん 」

紗莉はそういうと、ハルのほうに意識を集中させた。

ハルも (こいつらさえ消えれば… 。 早く能力者など、私と京だけに
ならないかしら)

と、笑いながら呟いているようだった。

やばい… 。

紗莉は単純に思った。

そして、今読み取ったことを留依と真由美に小さな声で伝えた。

「 嘘だろ… ？ 」

「 留依… 、嘘じゃないんだよ。 ホントなの。 信じて？ 」

留依と真由美は互いを見つめあった。

「わかった。信じる。でも、どうすればいいの？」

真由美は息をのんだ。

「わからない。だから、隼人に訊いてみる」

「どうやって!？」

真由美は隼人を眉を顰めながらみつめた。

そして、もう一度留依のほうに、向きなおした。

だが、留依は両手で頭をおさえていた。とても苦しそうに。

真由美は留依の背中を手でさすった。

「大丈夫？」

「うん。あ、治った。もう平気」

留依は真由美と眼をあわせた。

「そう…」

「今ね、未来が見えたかもしれない」

「え…どんな？」

もう、未来がみえることなど、あまり不思議だと思わなくなった。

留依はわらいながら、

「深山家の3人と、藤沢家の3人で逃げているところだった」

「どうやって?」

「あたしと、真由美と、紗莉の3人の力をあわせて」

そして、真由美と紗莉に、見たことを話した。

「なるほど…!」

紗莉はうなずいて、真由美と留依は、じゃあ行くよ! と、言っ
て走り出した。

それに気づいた京に命じられ、5人隊は真由美と留依を止めようと、
走り出した。

それを紗莉は簡単に、軽がると念力でとめた。5人と京はビクとも
できなくなった。

真由美たちは急いで橋をわたり、隼人たちのところへ走った。

「隼人さん! ハルさんと、京さんは…!」

真由美は息を切らしながら、隼人に伝えた。

「わかった。でも…これからどうすれば?」

「まかせろ、タコ」

留依はハルたちの前にたった。

そして、自分の顔の前に両手で拳をつくり、それらを勢いよく地面になぐりつけた。

「なにしてるの!？」

ハルは急いでやめさせるよう、5人に命じたが、もう遅い。

とつくに、ハルたちの立っている地面は割れてしまい、追いかけることができなくなった。

京やハルたちに睨みつけられながら、紗莉たちは川の上流へと駆け上がっていった。

第12話 2000年の女。

もう、30分は走っただろうか…。

太陽はすでに沈み、あたりは闇になっていた。

紗莉と留依、真由美はとつくに疲れていた。

隼人と、濃い茶色の髪の色をした男と、金髪の男がいた。

「もう、ここまで来れば大丈夫なんじゃない？」

真由美は腰をおさえ、夜空を見上げながら呟いた。

「そつだよな。まあ、きりのいいところまで行けばいいんじゃない？」

留依はとても疲れているという様子ではなかった。

普段から動き回っていたからだだろうか。

特に疲れていたのは紗莉だった。

ここに来るまでは、ただのダメ女。だらだらと一日中過ごす日々は珍しくなかった。

だから、体力なんてあまりなく、すぐ疲れてしまう。

終始無言の紗莉は、留依に眼で合図を送った。

「そつちの、男子はそれでいい？」

留依は男子のいる左側に顔をむけた。

「いいよ」

隼人もさすがに疲れていた。

留依は無表情で前に向きなおした。

それから10分ほどあるくと、小さな家がだっていた。

レンガ造りの家。屋根とドアは木造だった。

新しくもなく、古くもない家。

家の前には畑があり、なすやきゃべつなどの野菜や、果物が栽培されていた。

畑の前にたち、家を見つめた。

「誰がいる。女だ」

金髪の男が言った。

「あ、こいつリーダー能力なんだ。名前は仁」

隼人が紗莉に紹介した。

こつちも紹介しないと、と焦った。

「私は紗莉。念力と心読みです。あ、こちらはね、真由美と留依。真由美が治療能力で、留依が怪力と予知」

真由美は丁寧におじぎをした。

留依は周りの山をみていた。

「俺は隼人。で、茶髪が洋司。金髪が仁。洋司は地面を移動させることができるんだ」

洋司という人は無口で、クールな雰囲気。

仁は明るそうな人だった。

自己紹介をし終わったときだった。

家の扉が開いた。

「あの、どちら様でしょうか？」

1人の若い女性がたっていた。

艶のある黒髪、髪型はボブだった。

赤を帯びたピンクのカーディガンを羽織り、白の膝丈ぐらいのスカートをはいていた。

紗莉たちは近づいていった。

よくみると、その女性は垂れ目だった。

白い肌。まるで雪のようだった。

「私たち、この下のほうにある城から逃げ出してきたんです」

真由美が紗莉や留依を見ながら説明した。

それをきいて、その女性は

「わかった。とにかく、中へ入って」

彼女は紗莉や隼人たちを中へ招き入れてくれた。

中はとてもシンプルだった。

ただキッチンがあり、ただ真ん中に10人掛けのテーブルが置いてあるだけだった。

あとは寂しそうに、ダンスや、洋服がそこらへんにあるだけであつた。

「ごめんなさい、汚くて」

あわてて散らかった本を本棚にしまった。

そして、イスにかけるように、その女性は言った。

紗莉たちはさりげなく座った。

ホットミルクティーを7人分注いだ。

「さ、のんで。あ、申し送れましたけど、私は和歌子と申します」

紗莉や真由美、留依たちも自己紹介をした。

いただきます、といって少し啜った。

とても美味しく感じた。

「で、どうしたの？　もしかして能力者？」

その言葉は、眼を丸くさせた。

「え、何で分かったんですか！？」

仁は和歌子のほうを見て、驚いてみせた。

和歌子は何の能力か訊いてきた。

その質問に、戸惑いながらも答えた。

「私はね、多分、あなた達を待ってたんだと思う」

ミルクティーを両手でもちながら、彼女はつぶやいた。

「何でそう思うの？」

紗莉はきいてみた。

すると、和歌子は教えてくれた。

「うーん。実はね、私はおよそ2000年間生き続けているの」

冗談で言ってるものと、少し思った。だが、ここ最近、常識はずれのおことがおきるので信じないわけではなかった。だけど、やっぱり和歌子を疑った。

「長い話になるかもしれないけどいい？」

彼女らは頷き、和歌子は話を始めた。

とりあえず、きいてみよう。

そして、和歌子の話にのめりこんでいった。

それは、2000年も昔のことだった。

1人の魔女がこの世界のどこかに暮らしていた。

当時8歳の和歌子は魔女の弟子だった。

ある日、魔女の部屋で美しく、奇妙なペンダントを見つけた。

赤い水晶のようなものがついていて、その中で封印されるように火が燃えていた。

どうしても欲しくなった和歌子は、それを盗んでしまったのであった。

だが、その日のうちに魔女は気づき、

「お前には罰を与えることにしよう」

そういつて、魔女は和歌子に呪いをかけた。

その呪いは、ある役目が終わるまで解けないというものだった。

「役目はいつ終わるのですか？」

恐る恐る和歌子は魔女に尋ねた。

魔女はニヤリと微笑み、

「2000年後だよ。ある若者達がお前の元へやってくる」

「若者？」

「そうだ。そいつらを助けられることができれば、呪いは解けるだろう」

「解けたらどうなるの？」

「死ぬだけだよ。心配するな。ちなみに20歳前後で年はとらなくなる」

そう言っつて、魔女はその日のうちに亡くなった。

和歌子は、多分魔女も呪われていたのだろうと、今は思っている。

あのペンダントを触れたら、魔女の呪いが解ける、とか…。

又は、あのペンダントの中に閉じ込められていた炎は、魔女の命だったのではないかと…。

「　　ってな感じ。どう？　おかしな話でしょ？　でも、ホントなの」

和歌子は寂しさを隠すように、笑った。

もうすぐ死んでしまうのね…。

紗莉は和歌子の心の声が聞こえた。それは、あまりにも不安に満ち溢れていた。

なんと言っているのか、わからない。

「まあ、今夜は泊まっていきなさい」

和歌子は寝る部屋を教えてくれた。

「それじゃ、おやすみ」

和歌子は先に奥の部屋にはいっていった。

後をおうように、紗莉は指定された場所にはいった。

真由美と留依も同じ部屋へ。

隼人たちは、その向かいの部屋に入って、一夜をすごした。

第13話 反撃

なかなか眠れない真由美は家の近くの掛けに足をぶら下げて座っていた。

落ちても自分で治療するから大丈夫だと思い、あと2時間ぐらいで昇る朝陽を待っていた。

まだあたりは薄暗かったが、この雰囲気は真由美にとってたまらなく好きだった。

「何してるの？」

真由美は後ろを振り向いてみると、洋司が立っていた。

「眠れなくて…。洋司さんも？」

「洋司でいいよ。…いや、別にそういっくんじゃないけど」

「そっか」

洋司は真由美の隣に座った。

別に話すことなどないので、ただ座っていた。

だけど、いつか、洋司が口を開いた。

「お前、この戦いが終わったらどうなると思うっ？」

「どうなる…んだろっね」

真由美は他人事のように言ってみた。

空が少しずつ明るくなっていく。

「そうだな…。京達がなにもしなければ、きっと変わらない生活をするだろう」

真由美はクスッと笑って、洋司をみた。

「そっかもな」

洋司も静かに笑っていた。

初めて顔に表情を浮かべている洋司を見た気がした。

「でも、未来はわからないからね。あ、留依ならわかるか」

「ふーん。見れるんだ」

「うん。留依と紗莉は2つ能力を持っているけど私は1つ…役立たずなんだよね」

苦笑いをしながら空を眺める真由美。

洋司は真由美を慰めるように、言葉をかけた。

「そんなんで役立たずとか決めるのはよくないんじゃないん？」

洋司は真由美のほうをみて、笑った。

「そうかな…？」

「まだ始まったばかりだろ」

真由美は涙が出そうになるほど、嬉しかった。

「じゃあ、頑張ってみる」

「ったく…」

洋司は真由美を気に入った。

はじめてこんな人間を見た。

2人は朝陽を眺めながら、ささやかなひと時を過ごした。
第13話 花畑

「おはよう」

紗莉が眼を半開きにしながら、キッチンにいくと、和歌子が朝食の仕度をしていた。

何かを鍋で温めているグツグツという音。

包丁で野菜を切る音。

そして、窓から入り込む太陽の光。

テーブルの上には、サラダと紅茶が1人分用意されていた。

「さ、座って。朝ごはんにしよう。みんなまだ寝てるの。紗莉が一番ね」

和歌子は白いラインのはいった黄色い半そでのワンピースを着ていた。

気づけばもう、夏だった。

「夏なのか…。全然気づかなかった」

拍子抜けた、紗莉。

和歌子は、紗莉の姿をみて、まったく、という顔で笑った。

そして、紗莉は和歌子にだされたトーストに苺ジャムをぬり、かぶりついた。

「なあ、紗莉。真由美と洋司、なんかあったんじゃねえか!？」

留依と紗莉は和歌子からの頼みで、森の中で何か食べられそうなものを探しに行くことになっていた。

赤い籠を片手に、赤い木の実や、パイヤやらバナナやら…。

「そうかなあ? …でも、わからなくはない」

「だろ!? ありやなんかあったな」

「まあ、いいじゃない」

「こんな、いつ襲われるかわからない時期に、いいのか!？」

留依は自問自答しているようにも見えた。

紗莉は留依の肩に手をのせ

「いいじゃないの! 少しくらい面白みがあつたほうが」

留依は下を向いて、またもう一度紗莉のほうに顔をあげた。

「そうだな。おもしろいからな。…でも、いつ京たちは攻めて来るんだ?」

留依は京たちの屋敷のある方向をにらみつけた。

その眼は、するどく、挑発的だった。

その後も紗莉と留依は籠に溢れるほど、木の実などを詰め込んでいった。

「おかえり！ ちょっと、見てよ！ 京たちからよ！」

小屋にもうすぐ到着するところで、真由美が慌てて飛び出してきた。

真由美の手には、1枚の汚れた紙切れがあった。

そこには“今夜、そちらにむかう。準備しておけ”とあった。

時間指定などはされていない、いつ来るかわからないといった状況だった。

「…今夜ってことは、太陽が沈んでから？」

紗莉は籠を右手から、左手に持ち直した。

「わからないの。多分、そうだと思っただけど」

真由美は小屋に戻ろう、と言い、駆け足で戻った。

「とにかく、作戦立てようにも、立てられない。だから、臨機応変！自分の事は自分で守る！コレが作戦だ！！」

仁が隼人に作戦案をだしていた。

隼人は、いいじゃん！と、今回の、そして最後の作戦が決まっていた。

「っちゅーわけで、OK？」

隼人は5人に呼びかけた。

わかった！とか、了解する声が飛び交う。

最後の戦いになるのだろう…。

紗莉はイスに座って、ぼーっと考えていた。そのうち、眠りにもついていた。

気づけば、テーブルの周りには、和歌子と紗莉だけだった。

窓の外を覗けば、オレンジ色の夕日が海に輝いていた。

「みんな、自分の部屋で、過ごしているわ」

寝起きの紗莉に、優しく言う。

紗莉はさつきから、和歌子の心が不安の塊になっているのが気になっていた。

和歌子の表情も、少し暗い。

「散歩にでも、出掛けない？ とっておきの場所があるの」

紗莉は笑顔で頷くと、2人は小屋を出た。

「この2000年間、色々なものをみてきたわ」

少し歩いていると和歌子はしみじみと、思い出話を始めた。

和歌子は青とオレンジが混ざり合う空を眺める。

紗莉は静かに、きいていた。

人々の喜び、悲しみ、戦争…。

どんなことがあると、この森で、孤独に暮らしていた。

「じいよ」

和歌子が案内してきたのは、一面の花畑。小屋からも近い。

まだ、みたことない花もあった。

甘い蜜の香りがあたりを包んでいた。

「すてき！」

紗莉は花の近くに座った。とても、花の上には座れない。

すると、和歌子は呟くように、

「私は、2000年生きて、まだ20歳そこそこ。もし、願うならおばあちゃんになって、顔がしわで深く刻まれて、それで静かにベツドの上で息を引き取るの」

和歌子の頬には一粒の涙が流れていた。

その泪に続くように、たくさんの涙が流れ出してきた。

「死というものは、誰にでも訪れるもの。だけど、突然すぎるよ、こんなの」

和歌子は手で顔を覆った。

紗莉は立ち上がり、和歌子の背中をさすった。

“怖い…。死ぬのは怖い”

心の声は、さつきから同じ言葉が連呼されていた。

「私は、あなたと隼人の封印されていた力を解くのが役目なんだわ」

「…じゃあ、解かないでいい！ 解かないで！」

紗莉も、和歌子は死んでほしくない。

だけど、解かないわけにはいかないようだった。

「だめよ。解きそこねたら、私はどうなるかわからない」

魔女に罰を与えられたとき、言われたらしい。

和歌子は泣きじゃくっていた。まるで、子供のよう…。

紗莉は突然、昔の記憶が蘇ってきた。

自分が子供の頃、何かに怯えていたとき、綺麗な女性に抱きしめられたことを…。

紗莉は今、それをすべきなのだと、根拠なく思った。

そして、紗莉は和歌子を守るように、包むように抱きしめた。

何も言わず、ただ暖かい心をもって。

和歌子は涙をふいた。

「そうよね。誰でも死は訪れるのよね。…もう、消える決心はついたわ」

和歌子もギョツと紗莉を抱きしめる。

紗莉が静かに涙を流したとき、隼人の声がした。

「紗莉！！ 京たちが来たんだ！ どこにいるんだ！！ 早く来てくれ！」

隼人は急いでいるようだった。

「…紗莉。さあ、早く行きましょう」

和歌子と紗莉は黒髪を揺らしながら、隼人がいるところへ走っていった。

第14話 人形

川の近くに、彼らは現れた。

「待ちわびた。この日を」

京は猛犬のように吠えていた。

切立つ山が聳え立つ場所に到着した紗莉が気づいたのが、京とハル以外の人間の数が3人しかいないこと。

それも、見知らぬ人たちだった。

この間は海や鈴、光、湊そして真人など、ハルの部下をいれても10人いたはずなのに。

「ふふふ…。お前ら、こいつらの数が減っていることに気がついたのか？」

京はハルと笑っていた。

「こいつらはねえ…人形なんですよ」

ハルの言っている意味があまり理解できなかった。

だが、実際に人形とやらを作ったとき、紗莉たちの目は丸くなった。

まず、京とハルの後ろから、隠れていた人間がでてきた。

人間といっても、彼らが生み出した人形なのだが…。

それらはもともと、土と水から作られた。

よく見れば、京の後ろからでてきた人形は海だった。

海だとわかったときも、なんだか悲しくなっていた。

ただ、海がもう1人の人形を飲み込み、1つの女の形をした人形と化したとき、紗莉らの胸は張り裂けそうになった。

思わず口を両手でおさえた真由美。

そして、5秒もしないうちに、海と合体した新たな人形が完成した。

「こいつは2人分のパワーも飲み込んだことになり、1人の体で2人分の力を発揮できる」

京は満足げに、彼らを見下すように、高笑いしている。

そんな京の姿を見て、紗莉は怒りを覚えた。

「テメエら！ 何しやがってんだよ！」

隼人の血が逆上していくのが、手に取るように分かる。

「まって…。じゃあ、あその他の2人も混ざっているの？」

真由美はショックを抑えながら、呟く。

隣で洋司が

「右側にいるのは、多分、俺らと一緒にいた人形だな。でも、少したくましい表情…」

「湊だわ。きつと…。なんだか、湊にも似ている」

「御名答。そいつには真人もはいつている」

ハルは手をたたき、にやけた。

「左の人形は、鈴つていうのと、私のところにいた人形2体。だから3体分ね」

面白そうにする京とハル。

留依はわざと笑ってやった。

「わはははは！ そりゃ結構！ でも、あいつらが無念でしかたねえな！」

「ふん。人形に無念も何もないだろう。だって、人形に心など存在しないのだから」

ハルは後ろにいる2体に命令をだした。

男と女の人形。

もともと知っている人だというのは、なんだか戦いにくい。

「さ、パーティーの始まりだ」

京はすごい速さで紗莉に体当たりした。

紗莉は岩に突っ込んでいく。

「紗莉！」

留依は助けに行こうとすると、女の人形が行く手を阻む。

「鈴！ お願いだからどいて」

留依は冷たく言い放つ。真由美も後ろから不安そうにみつめていた。

でも、人形は留依を殴ろうとした。

だが、留依はその手を止めた。

腕を力いっぱい握り締めた。

「…これじゃあ、きりがないねえ」

ハルが言う。

「そんじゃ、飛ばしてあげよう。それぞれ違う場所へ」

そして、紗莉と隼人以外、どこかへ飛ばさってしまった。

「…ちよつと！ 何してるの！？」

紗莉は念力で岩を奴らのほうへ飛ばした。

岩は京の前にいる男の人形に粉々に粉碎された。

「海！ 思い出してよ！」

海は無表情で、死んだ人間のような眼をしているだけだった。

「いってーな、こりゃあ！」

留依が飛ばされてきたのは、乾燥して、樹がほとんど枯れている場所だった。

隣には仁がいる。

そして、5メートルはなれたところには女の人形がいる。

「クッソー！！ なんであえてのオメエなんだよ！」

仁はいきなり文句を言う。

留依は立ち上がりながら、

「ハンツ！ そりゃこっちのセリフだな」

仁もたちあがり、2人は人形のほうを睨んだ。

「義理と人情はナシだ！ もう、こいつはあたしの知る湊やら真人じゃねえ！」

「遠慮せず、いくっきゃねえな」

仁は近くにあった石を人形に投げつけた。

その石は鋼になり、人形の眼の下を血色で塗った。

「あんだ、そんなことできたっけ？」

「へへん。この間から、できるようになったんだ！」

「へー。じゃあ、あたしの足を引っ張らなくて済みそうだな」

「どつという意味だ？」

仁と留依は楽しむように、戦っていった。

「洋司さん、大丈夫ですか？」

「だから、洋司でいいって言ってんでしょ？」

戦い始めてもう、3時間は過ぎていた。

洋司と真由美は緑の生い茂る、空気がきれいなところにとばされてきた。

そして女の人形もただ、立ち尽くしていた。

「俺があの人形を攻撃するから、傷ついたら治療してくれる？」

「わかりました」

洋司は地面をうまく動かし、地面を切り取り、それを人形の頭の上からぶついたり。

毒をばら撒いたり…。

そして、洋司の腕に傷がつけば真由美が手当てをする。

これらの繰り返しだった。

「海さん！ どうしたんですか！？ 私は元の海さんがすきなんです！」

真由美は洋司の後ろから叫んだ。

だが、海の形をした人形は返事をしなかった。

洋司は何も言わず、真由美を守っていた。

そのあとも、何度も何度も叫び、問いかけたが海の心には聴こえないようだった。

「…洋司、どうすればいいの？」

「息の根を止める、のはやめたいだろ？ 俺も好きじゃない」

「海さん！」

真由美は彼女の元へ走り出した。

洋司は、バカ、戻れ！ と、とっさに口から言葉が出たが、真由美の足は止まらなかった。

そして彼女の前にたち、肩をつかんだ。

「目を覚ましてください！ 思い出してくださいよ」

無表情だった人形の頬に、大粒の涙が零れ落ちた。

人形が泣いている。 いや、海が泣いていた。

「助けて…」

洋司も真由美の傍に立った。

「わかった。 どうすればいい？」

「殺して」

真由美は海が真剣な眼差しで訴えていることに違和感を感じた。

「もし、本当に私のことを心配してくれているなら…。 お願いだから」

洋司と真由美は顔を見合わせた。

海は付け足すように、

「早くしないと、他の人格がでてきて、殺せなくなるから！ 急いで」

海はとても苦しそうだった。

早く楽にしてあげたい気持ちは山々だが…。

だけど、海にも限界がきてしまった。

洋司と真由美がもう一度海の顔を見たとき、もうそこには死人の顔しかなかった。

「海の心はもう、飲み込まれた」

人形はそう言うと、右手に刀をもった。

そして勢いよく、真由美の腹に突き刺した。

真由美はまるで海に刺された気がして、痛みとショックで洋司の腕の中へ倒れこんだ。

その後、洋司は地面をもりあがらせ、それを人形の頭の上から包み込むようにした。

一瞬にして、土に全身が包まれ、人形は土の塊となった。

洋司は少しためらったが、海と真由美のことを頭から離し、手のひらを固まりに向け、圧縮するように、手をギュッと閉じた。

5分後、洋司は土を人形から取り外した。

花畑の中で横たわった海は、安らかに眠っていた。

真由美も、深い傷を負ったが、面白いことに自分で治癒しているようだった。

おかげで、傷はほとんどふさがっていた。

洋司は何も言わず、そっと海の胸の上に黄色い小さな花をおいて、真由美を背中に乗せた。

山の向こう側から、戦っている声や音がする。

振り返らないで、夜の空に輝く星も見ないで、音のする方角へ、足を運んでいった。

「貴様らの力を見せてみる。さ、和歌子、封印を解くのだ」

「そんなことしたら、あんたら負けるよ!？」

「フン！ そんなことぐらい分ってるわい」

「は？」

京は突然、負けることを認めた。

何か、いやな予感がする…。

和歌子は2人の封印を解いていいのか、イマイチわからない。

もしかしたら、何かの罠かも…？

「どつという意味？」

紗莉がきいてもこたえない。

「それじゃあ、吹っ飛ばしてやる！」

隼人は和歌子のほうを向き、大きく頷いた。

もっと面白い戦いになるかと思っていたが、全然予想としていた戦いと違うものだった。

さあ、お前達の野望もここでおわる…。

そう思っていた隼人に、ハルが

「残念ねえ。もっと面白い人生が歩みたかったわあ。だから…」

ハルが京のほうに顔をむけ、ニコツとすると

「あなた達に面白い、人生を歩んでもらおうと思っの。どっ？」

隼人と紗莉は顔を見合わせた。

和歌子も戸惑っていた。

「悪い話じゃないわよね」

少し、ハルの顔が緩んだ。

絶対に何かたくらんでいる。

紗莉はハルの心を読もうとしたが、どうしたものか、読むことができない。

「ふふつ。紗莉ちゃん。私の心を読もうなんて…もうできないのよ」

「どうして!?!」

「死が近づいているから。いい? 私たち、能力者の心は死が近づいていると読めないの」

それじゃあ…。

ハルと今日はあとわずかの命。

「…では、お前らに良いプレゼントをくれてやるっ」

「いらない!!」

そして隼人と紗莉は和歌子の顔を見た。

和歌子も、仕方ないなあ、と言っているような顔をした。

「今…なのね」

「悪いけど、そうみただよ」

「今までありがとう。ホントに楽しかった」

紗莉と隼人は一言ずつ言うと、和歌子は涙を隠しながら笑う。

「何千年も寂しい思いをしてきたけど、最期にはしっぴかり楽しい思いもできて未練はない」

そして和歌子は何か呪文を唱えた。

なんていつているのかさっぱり分らなかったけど。

すると、力がみなぎってくる。

「行くぞ、紗莉！」

「OK！」

そして両手を大きく開き、京とハルに向けた。

さよなら…紗莉は京に口の中で言う。

いつの間にかあたりは真っ白い、隼人の光と、闇色の紗莉の華があたりを包んだ。

それに包まれている京とハルは何かを呟きながら死んでいった。

隼人と紗莉は少し気になった。

「あれ、洋司！…って真由美は背中かよ」

洋司は森の中で仁を背中に乗せた留依にあった。

この2人も長時間の戦いの末、勝利を収めた。

「真由美と良い感じじゃねえか」

「お前こそ」

「ワルイが、こいつはあたしの好きな男に似てるが違うね」

「他にいるのかよ？」

「まあ、そうだな」

洋司は仁をみて、だらしないなあ、と思った。

そんな洋司の顔を見て、

「こいつは、あたしを守ろうとして、傷を負った。あたしの好きな男に似てる」

「へー。どんなヤツだったの？」

「1億年かけても見つけられないようなヤローだった」

留依のいつもと違う、普通の女という顔が見えた気がした。

「洋司は真由美が好きなのか？」

「さー。でも、出会ってきたヤツン中で一番いい。」

「そうか…。あたしも早く会いてえな、アイツに」

留依はアイツと呼ばれる人に会うことを楽しみにしていた。

洋司は真由美の寝顔を見て、クスッと心の中で笑った。

「あ！ 紗莉と隼人を発見した！」

そして洋司と留依は走って紗莉たちのところへ走った。

「留依……。おわった。おわったんだよ」

紗莉は留依の顔を撫でた。そして、呟いていたことを伝えた。

留依は仁をゆっくり降りし、京とハルを見た。

そして後ろを見れば青い光に包まれた和歌子がいた。

「いままでありがとう。さよならの時間です」

「こっちこそありがとう」

洋司は、じゃあな、と笑顔で示すと和歌子も嬉しそうに笑う。

真由美と仁の頬を撫でると、目を覚ました。

真由美はバイバイと、仁はサンキューと心から言った。

見る見るうちに、和歌子の体は光の粒子になり、やがて風に揺らめいて天に消えていった。

「さあ、下山だ！」

満天の夜空の下、6人の男女が山道を駆け下りていった。

第15話 1年後

「成二！ 久しぶり！」

留依は大好きなアイツ、成二のもとへ急いで会いにいった。

成二は1人、コンビニで立ち読みをしていて、ちょうど店から出たところだった。

長身の、茶髪。前と全然変わってない。

成二は留依を目の前にし、キョトンとしている。

きっと久しぶりに会えて、驚いているのだろう…そう思った。

だが、違っていた。

「お前、誰？」

「成二、あたしだよ。ホラ…忘れたの？」

留依と成二は顔を見合わせる。

「初めて会うだろ？ 留依っていう名前は聞いたこと…あるよつな、

ないような」

「…忘れたの？ 留依だよ!？」

「悪い。わからない」

留依は居たたまれなくなつて、その場から逃げ出した。

成二は何か悪いことをした気がしたし、気になったので後を追つた。

公園の電灯が遊具を照らす。

そこで1人、留依は泣いていた。

きつと、呪いをかけられたんだ!

そう思ったとき、留依は怒りがこみ上げてきた。

声を殺して、静かに歩きながら泣いた。

こんなに泣くのは、久しぶり。

そんな姿を見た成二はモヤモヤ感に襲われた。

そついえば最近、心に小さな、けどとても重要な穴が開いていると感じていた。

もしかしたら、何か解決してくれるかもしれない…。

ゆっくり留依に近づいた。

「ねえ、君…」

驚いた顔で、成二を見る留依。

留依の顔は涙でグチャグチャだった。

「私…呪われているの！ 信じてもらえないかもしれないけど、本当なの！」

「どうすればいいの？」

「わからない…。でも、1つわかったことがある」

「何がわかったの？」

留依は一度、言うことをためらったが、

「もう、私たちは会わないほうがいいってこと！」

なんで会わないほうがいいと思ったのか、よくわからない。

多分、成二をみていると、寂しくなるからかもしれない。

だけど、本心はわからなかった。

「さよなら…」

留依は成二に背を向けて魂の抜け殻のように、姿を消した。

「…そっか。留依もなんだ。私もなんだ」

違う公園のベンチで留依と真由美、紗莉が話していた。

向かいのベンチには隼人たち3人が座っている。

「誰の記憶にも、私たちは存在していない」

「京とハルは最期の力を振り絞つてのろいを…」

隼人も寂しそうだった。

「んじゃ、ワタクシ、人肌脱ごうじゃないの！」

「何かすんの？」

留依は突然、ベンチから飛び上がった。

「いい？ 誰の記憶にも存在しないってことは、誰にも迷惑かけないっしょ？」

「でも…戸籍とかで親兄弟バレるんじゃないの？」

真由美はちよつと心配だった。

でも留依は

「戸籍も消されてた。多分、うちらが死んだとき、記憶がよみがえるんだと思う」

真由美は和歌子を思い出していた。

「んで…何するの？」

「日本を変える！」

留依は作戦をひそひそ話した。

「いい！ やろ！」

「ok！」

そして6人はベンチから立ち上がり、走り去っていった。

そしてそれから、日本のために、日本を変えるために、様々なことをしてきた。

能力を使って、心を読んで…。

いつの間にか、3年の月日がたっていた。

「今日未明、都内の池や林で変死体が発見されました」

そして桜の樹の下で眠るように死んでいる真由美が映し出された。

その顔は疲れ果てた、だけど充実していた生活を送っていたことを連想させた。

次々に死体が見つかった。

季節はずれの赤や黄色に染まった紅葉の樹の下には仁。

真つ赤なつる薔薇の中に1つだけ黄色い薔薇が咲いていたところは留依。

洋司は真由美が死んでいた桜の樹の上のほうで枝にもたれ掛かっていた。

隼人の死体は空から降ってきた。地上に降り立った隼人は目の色が白くなっている。

そして最後に紗莉。

紗莉は湖の真ん中で死んでいた。

紗莉の周りには薄い桃色の牡丹と鮮やかな桃色の睡蓮がたくさん浮いていた。

だが1つだけ黒い睡蓮が紗莉の顔のそばにあった。

しかし驚いたことに、紗莉の死んでいた湖は晴天にもかかわらず、黒くなっていた。

まるで紗莉のなかにいた悪のところがすべて湖に流れ出したかのようだった。

これらの死体は前代未聞で、多くの人々が花束をもち、それぞれの墓場へ足を運んだ。

紗莉らの死体は1000年経とうと、1000年経とうと、不老でいた。

まるで、和歌子のように…。

彼女らが死んだ瞬間、すべての人々に存在の記憶が戻った。

そして成二は留依を追い、自らの命を絶っていった。

今日もぬるい春風が吹く。

今日も天使の笑顔をもつ悪魔が空を飛ぶ…。

花と君と…（後書き）

読みづらいところがたくさんあって申し訳ありません。読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2245g/>

S A M E S O U N D S

2011年10月5日16時07分発行